資料1

基本構想骨子（素案）

まずは、冊子タイプのツールを制作。そのダイジェストをポスター・フライヤー（ペライチ）に展開

伝えるべきメッセージやストーリーをしっかり伝えることができ、かつ、より多くの市民の方々が
手に取り、持ち帰って長く見ていただけるツールとして、A5サイズ程度のコンパクトな冊子を想定。
その内容を要約・凝縮したものをポスター・フライヤー（ペライチ）にまとめ、
市内各所に掲示するという活用法も考えられます。

「問い」をベースに、河内長野市のこれまでとこれからを2部構成で伝える

第一部（前半）は、すでにある事実にもとづく一問一答。
いま第3の**ターニングポイント**を迎えていることや
これまで**河内長野市が培ってきた魅力（安心・安全・自然・つながり・歴史）**を伝えます。
「問い」と「答え」というかたちを取ることで、こちらが伝えたいことの一方通行にならず、
分かりやすく、かつ、興味を持って読み進めていただける冊子をめざします。

第二部（後半）は、**未来というまだ実態のないもの**について考えていただくきっかけをつくるために、
「問い」を未来へ向けて、その答えとなる選択肢・可能性をひとつではなくいくつも用意して、
「ふだんを生きる、じぶんが活きる。
知るほど暮らすほど「好き！」が深まる千年都市。」
という基本構想を紐解いていきます。

【第一部 構成・ストーリー案】

これまでいただいた市民・職員・審議会委員の意見から導き出された要素をもとに、
一問一答形式による展開を試みました。

ターニングポイントを迎えている河内長野の現状

「まちづくり」

＋

河内長野に現時点で既にそなわっている魅力

「安心・安全」「自然」「つながり」「歴史」

〇導入メッセージ

千年都市と、これからの十年。

今回の基本構想に込められた想い、
つぎの十年が、これからの千年につながっていくこと。

そして、この冊子を活かして、
一人ひとりが河内長野の魅力を再発見したり、
新しい可能性を見つけたりして、
楽しみながらまちづくりに参加してもらえたら、
というメッセージを導入で伝えられたらと考えます。

Q.
河内長野市のまちづくりは、
今、どうなってるの？

→

A.
ターニングポイント

若年層（0～15才）が7年連続で転入超過。
子育て世帯の転入が増えています。

＃まちづくり
千年都市に訪れた、チャンスの十年。
再生フェーズへのターニングポイントを迎えていること。

Q.
どうして、若い世帯が
引っ越してきているの？

→

A.
空き家の循環

大阪最少だった空き家率に変化のサイン。
長く住み続けるまちから、住み継ぐまちへ。

＃まちづくり
2003年、空き家率が府内最少。
それだけ長く定住する人が多い、ということ。
その空き家率に変化が生まれ、
空いた住居に新住民が転入するケースも増えていること。

Q.
大阪のなかでも、
河内長野が
いちばん強いのは？

→

A.
地盤

「強い地盤」ランキング、ダントツの最高スコア。
府内で1番地盤が強い河内長野。

＃安心 #1000年
府内で1番地盤が強いこと。
それによって重要文化財や昔からの暮らしが長く守られてきたこと。
文化財の多さ、府内2位。

Q.
河内長野は、
安心して住めるまちなの？

→

A.
防犯も、大阪一

刑法犯認知件数、府内最少。
防災も、防犯も、安心のまち。

＃安心
刑法犯認知件数、府内最少。
防災だけでなく防犯の面でも安心できるまち。

Q.
窓から見えるのは？

→

A.
みどりが近い

森林の面積は府内市中1位。
緑視率も高く、自然が身近にある暮らし。

＃自然
市域の67％が森林。窓から緑が見える「緑視率」も高いこと。
おおさか河内材の生産地でもあること。
河内長野を代表する岩湧山は、登山者や観光客にも親しまれている。

Q.
川に行くと見えるのは？

→

A.
ホタルゃオシドリ

大阪で唯一、全域水質AAの石見川。
秋になるとオシドリがやって来る、滝畑ダム。

＃自然
独自の水系、きれいな水。全域水質AAの石見川をはじめ、
一級河川の石川も滝畑ダムをはじめとする治水によって地域を支え、
毎年10月ごろになるとオシドリが飛来する。（河内長野八景のひとつ）
流域にはホタルが飛び交う場所も。

Q.
道のそばで
にぎわっているのは？

→

A.
道の駅

人気ランキング大阪1位。
道の駅 奥河内くろまろの郷、絶好調の発進。

＃つながり ＃自然 ＃まちづくり
2017年に府内10番目の「道の駅」に登録された
「道の駅 奥河内くろまろの郷」。
自動車で訪れる人だけでなく、サイクリストにも人気で
まだ生まれて月日の経っていない道の駅でありながら、
人気ランキングで府内1位に輝く。
河内長野の旬の食材を活かしたビュッフェや、
河内小麦でつくるパン、植物園など、地域の風土が息づいている。

Q.
地域の自然や暮らしを
守っているのは？

→

A.
市民

リサイクル率、府内2位。
まちのゆたかさにつながる、一人ひとりの営み。

＃つながり
河内長野のリサイクル率は府内2位。
市民や事業者たちの日頃の取り組みが、自然を守ることにつながっている。
リサイクルだけでなく、さまざまな活動において
主体的にリーダーとして活躍している市民・事業者の方々がいる。

Q.
新しく暮らしはじめた人も、
馴染みやすいのはなぜ？

→

A.
心地よい つながり

新しい人にひらかれた河内長野。
伝統も、新しい挑戦も、大事にできるまち。

＃つながり
新しくまちに入ってきた人を受け入れる包容力。
子育てや福祉、世代を超えたつながり。
伝統産業と新産業。

Q.
河内長野の歴史は？

→

A.
1000年

中世文化遺産の宝庫。
日本遺産に認定された「中世に出逢えるまち」。

＃1000年
1023年に藤原道長が「高野参詣（高野詣で）」を行ったという
記録が残され、その頃から人口が増え始めたことが
発掘調査でも確認されている河内長野。
その歴史のながさや、地域に残る文化的な資産について。
酒蔵通りの景観（街並み）・高野街道・観心寺・金剛寺・延命寺など。

Q.
河内長野で1000年、
続いてきたものは？

→

A.
ふだんの暮らし

文化財だけでなく、この地で連綿と続いてきた
「暮らし」そのものが、まちの資産。

＃1000年
特別に指定された重要文化財だけでなく、
この地で千年にわたって続いてきた「ふだんの暮らし」。
京都のような華やかな文化の中心ではなく、
河内長野は日々の暮らしの中に価値があり、その価値を見つめ直したり、
さらに磨いたりすることで、魅力を育んでいける。

【第二部 構成・ストーリー案】

未来というまだ実態のないものについて考えていただくきっかけをつくるために、
「問い」を未来へ向けて、
その答えとなる選択肢・可能性を、ひとつではなく、いくつも用意して、

ふだんを生きる、じぶんが活きる。
知るほど暮らすほど「好き！」が深まる千年都市。

という「ありたい姿」を紐解いていきます。

○後半 導入部

ふだんを生きる、じぶんが活きる。

知るほど暮らすほど「好き！」が深まる千年都市。

後半は、「ありたい姿（仮）」の紐解きをしていけたらと考えます。

10年後、私たちは
どんな「ふだん」を生きているのだろう。

自然が元気、みんなも元気。

豊かな自然を手入れしながら守り続けることが出来ている（守るための担い手がいる。担い手は役所だけでなく、市民も）
→自然がただ現状維持ではなく、市民のみんなで思い入れをもって手入れをすることで、
　よりいきいきとしたものとして自然を感じることができる状態に。
　義務として手入れに取り組むのではなく、自然とかかわる時間がふえることで、日々のゆたかさや活力が増していく。
　さらに、ゆたかな自然を活かして農林業や地場産業、商業もより発展し、産業・経済の面でも元気に。

ホタルも、子どもたちも、光ってる。

手入れされた自然の恵み（きれいな水、ホタルが飛ぶ風景、農産物）を子どもも大人も楽しむ。
→ゆたかな自然が身近にあり、子どもたちが顔を輝かせながら、自然に親しんでいる。
　大人たちもその様子を見て良い表情をしている。

水が美味しい。川が、まちが、美しい。

手入れされた自然の恵み（きれいな水、ホタルが飛ぶ風景、農産物）を子どもも大人も楽しむ。
→石見川の水質や滝畑ダムによる治水が守られ、ふだんの暮らしの中に、おいしい水がある贅沢。
　街の美化やごみの適切な処理といった、美しい自然を守るための取り組みも活発に。

求心力も抜群？ 日本一「安心」なまちへ。

治安の良さ、地盤の固さが知られ、「安心」がまちのブランドになっている。
山が近いゆえの土砂崩れの心配についても、ちゃんと対策が取られている。
→「安心のまち」として全国的に名前が知れ渡り、それが多くの人を惹きつける求心力（ブランド力）に。
　医療・救急や消防などの体制も整え、万一病気になったり火事が起きたりした時も「安心」を感じられるまちに。

オンラインで、まちづくりに参加？

デジタル化が進み、市役所にも声が届きやすくなっている。
また、負担が重すぎず、若い人や共働きの人も町内会・自治会に参加しやすくなっている。
→小さな子どももいる若い世代が、自宅で寛ぎながら町会に参加しているイメージなど。

ちょうどいい近さの、ご近所さん。

負担が重すぎず、町内会・自治会に入りやすい。デジタル化が進み、若い人や共働きの人も参加しやすくなっている。
→疎遠ではなく、近過ぎもしない、ほど良い距離感で付き合えるご近所さん、コミュニティ。

「じぶん」が活きるまちって、どんなまちだろう。

全員、主役。全員、ファン。

一人ひとりの個性が活かされ、活躍できるまち。
→いろいろな人がいて、誰もが主役になれる。と同時に、それぞれが誰かのファンになって応援もし合っている。

支えて、支えられて、活かし合って。

一方的に「支える側」「支えられる側」ではなく、互いの長所や特性・経験を活かして、地域でイキイキと活躍している。
→自分だけでできないことはどんどん支え合い、自分が好きなこと、得意なことはどんどん活かし合えるつながり。
たとえば、ヤングケアラーと呼ばれる子どもや、ひとり親家庭、障がいをもつ子どもなど、
困難な状況にある子どもを支える取り組み。
高齢者や、障がいをもつ方も、一方的に支えられる側ではなく、「支える側」としてこうした取り組みに参加できる
つながりをつくり、そこで誰かに支えてもらった子どもたちが成長して、大人になってまた誰かを支え、
支え合いの循環が生まれていくようなまちに。

地域がまるごと、学校。

こどもが学校・地域で学ぶ場が様々にあり、豊かな体験のもとで成長している。
→教室の中だけが学びの場ではなく、地域全体がゆたかな学び舎に。一人あたりの面積が府内2位を誇る都市公園もさらに整備され、子どもたちやその家族、世代を超えて多くの人が集まる場になり、貴重な学びと交流が生まれる場になっている。

学びを、誰かの喜びに。

生涯学習内容を地域に活かせるようになっている。
→大人も学び、その学びを、まちづくりに還元していく好循環が生まれている。

動いた先で、いくつもの感動を。

「くるくる」のような移動手段が南花台以外にもある（免許返納しても困らない）
→自家用車がなくても、活発的に動き回るシニアの方や外国籍の方。動くことで、感動に出会うチャンスを広げていける。

みんなバラバラ、みんなイキイキ。

老若男女、国籍・障がいの有無に関わらず個性が活かされ、イキイキと暮らせる。
→多様な人たちがいて、それぞれの違いを個性として活かし合いながら、みんなが好きなこと、得意なことを楽しんでいる。

これから、どんな「好き！」を深めていけるだろう。

まちの顔を、笑顔でいっぱいに。

住む人、訪れる人にとって、まちの顔となる駅前が整備され、にぎわっている。
→まちの顔である駅が、笑顔の人々であふれ、駅も笑顔に。
　駅を基点に、まちの景観が美しくなったり、新しいお店や楽しいスポットができたり、商店街が再び活性化したり。
　それが人を惹きつける魅力となって、地元の人も、観光客の人たちも集まり、各所に活気があふれている。

あたらしい一歩、踏み出し放題。

子育て世帯・共働き世帯に選ばれる。／新しく転入した人も地域になじみやすい。
→大切な人と一緒に、あたらしい一歩を踏み出すのに、「このまちがいい！」と思える場所へ。
　みんなもその一歩を応援してくれて、支え合っていけるから、
　新しい生活やチャレンジしたいことをどんどん実現させていける。

推せるものを、育てるうれしさ。

市民が応援したい、大切にしたい、と思うものがそれぞれにあり、市民が主体的にそれを守り育てている
（スポーツチーム、歴史・文化財、お祭り、公園）
→一人ひとりが自分の推しを持ち、自分たちの手でそれを育んでいく

住（じゅう）を、もっと自由に。

住み方の多様性（一戸建てもアパートも古民家も）
→いろいろな住み方、暮らし方を選択できる自由。たとえば、ニュータウンでふだん生活し、週末は集落の田畑に出かける、といった多様な地域の魅力を活かした暮らしの楽しみ方も。

畑で活躍するクリエイター？

農業や林業の振興
→テクノロジーや、デザイン的な思考を取り入れることで、農業や林業がさらにクリエイティブな仕事に。
若い発想や感覚をもった人たちが、畑や山で活躍できる新しいカルチャーが生まれている。

つながって、叶えていく。

つながり、やりたいと思って行動したことが「実現できる」まち
→どんどん新しい一歩を踏み出すだけでなく、みんなでつながって力や知恵を出し合えば、
実現したいゴールまで辿り着けるまちをつくっていける。

○結びのメッセージ

（仮）

一人ひとりの「好き！」が、

つぎの十年、つぎの千年をつくっていく。